

友人とは **あなたが** あなた自身になるための
完全な自由を与えてくれる人だ

友達との日々



舞台にはK君と僕の二人だけ。その時、一瞬思った。小学生の時から、ずっと八年間一緒にK君とこの舞台に立って劇をしてきたのだということ。二人だけで共演できるのはこれで最後かもしれないと思うと、なんだか寂しさでいっぱいになった。残り少ない中学生生活を大切に過ごそうと思った。北畠君だけじゃない、この五人で劇するのは最初で最後なのでもっと寂しさがこみあげてきた。こんな気持ちはいくつになっても、忘れないような感じがした。そう思っているうちに、最後のセリフがきた。

「今やりたいことが見つからなくても、きちんと前を向けば必ずやりたいことが見える。前を見て歩くんだ。」

僕には夢がある。それは、デフリンピックの卓球競技でてっぺんをとること。もう一つはデフリンピックという競技が、オリンピックと同じくらい世界中に知れ渡ってほしいことだ。その夢を叶えるためには、目の前に立ちはだかる高い高い壁、他の人よりも倍の練習など、たくさんの試練がある。でも、必ず乗り越えてみせる。だから、これから前を見て歩くんだ。

「ひいじいじと僕」 中学部 3年 F 君

- Q 「ずっと八年間一緒にK君とこの舞台に立って劇をしてきたのだ」とあります。F君にとってK君はどんな存在ですか？
- Q 「こんな気持ちはいくつになっても、忘れないような感じがした」とあります。なぜ、そう思ったのですか？



私は寄宿舎に戻って、台本を読んだ。そこには、色々な気持ちが描かれていた。～その時思った。

「私と同じだ」

友達はいるけれど、本当は嫌われているんじゃないか、友達として思ってくれてないんじゃないか、私は何のために生きているのか分からなかった。ただただ自分は周りの人に、どう思われているのかが怖くて不安だった。誰もいないところで

過ごしたかった。でも、心のどこかで一人になりたくないと呼んでいた気がした。一人になりたいのか、なりたくないのか分からなかった。答えが見えなくて、苦しんでいた。自分のことなのに、自分が分からなかった。楽しいって何だろう。嬉しいって何だろう。

でも、今は違う。少しだけ周りのことが見えるようになった。きっかけは二人の後輩だ。後輩とたくさん話をして、気がついたら自分から友達に話しかけていた。私は気がついた。私は一人ぽっちではないことを。ただ、自分から話しかけていないだけだ。

「心」 中学部 3年 N さん

- Q 「楽しいって何だろう。嬉しいって何だろう。」とあります。今のNさんはどんなことだと思っていますか？
- Q 「ただ、自分から話しかけていないだけだ。」とあります。人の苦しさ、人の悩みは結局、どこから生まれてくるのだと思いますか？



最後の場面。

「人は周りの誰かに与えることで幸せになれるんだ。僕はちゃんと前を見て歩くよ。」

と叫んだとき、涙が出ていた。幕が閉まった後、自分の気持ちを全部出したようで気持ちがさっぱりとしていた。今までにない感情で不思議な開放感があった。

ぎんちゃんのように自分にも心の葛藤や悩みがたくさんある。ずっと一人で抱え込んでいた時もあった。そんな時に、「大丈夫」と声をかけてくれる友達、先生、家族。そばに人がいるだけで僕は本当に幸せだと思った。そこから、ひとりぼっちではなく、みんなと一緒にいることに改めて気づかされた。

これから先、いくつも困難があると思うけれど、くじけずに前を見て歩きたい。自分を責めて一人で抱え込んでいた自分から卒業し、周りの人に何かを与えたい。そして、お互いに幸せになれるようなことをしたい。

「 感謝 」 中学部 3年 K 君

- Q 「今までにない感情で不思議な開放感があった。」とあります。今、振り返ってみてその時の気持ちを詳しく教えてください。
- Q 「周りの人に何かを与えたい。」とあります。一番与えたいものは何ですか？

自分のことは自分でできる 必要があれば助けを求められる
人と関わりながら 主体的に生きていこうとする生徒

という目指す生徒像

のりこえよう 仲間とともに 輝く自分 ヘイカモン☆

という児童生徒会スローガン

この2つを具現化したような、中学3年の3人の作文です。
青龔祭当日。劇を終えたK君が涙を流しながら体育館から出てきました。
昼に尋ねました。

Q 「K君。涙の訳を教えてください。」

A 「劇が終わって、今までの練習のこととか色々思い出したら、涙が出てきました。」

3人に共通していることは、単なる行事の取り組みではなく、自分自身と向き合い、友達や家族の支えに気づき、これからの歩みに自信と希望を抱いたということです。
そして、私たちにもたくさんのことを与えてくれた作文です。ありがとう。